

# 交換過程論

沖 公祐

2005,7,1

『資本論』の交換過程論をどのように位置づけたらよいか。確かに、交換過程論には、価値形態論ですでに議論されたことを再度蒸し返しているような座りの悪さがある。宇野弘蔵は、このような問題を踏まえ、交換過程論を原論の展開から排除すると同時に、そこで扱われている論点の一部を価値形態論に組み入れることで、価値形態論の再構成を行なった。宇野は、交換において欲求が果たす役割の重要性に改めて注目し、そのことによって、相対的価値形態と等価形態の非対称性を明確化したのである。

しかし、宇野は、欲求に重要性を付与する一方で、欲求自体の性格については、ほとんど言及しなかった。このため、宇野の方法を踏襲する論者のなかにも、欲求の捉え方の相違に応じて、価値形態論の展開に分岐が生じることになった。また、交換過程論を価値形態論に組み込んだ結果、マルクスにあった交換と表現の区別が失われることになり、宇野派の価値形態論は表現論と交換論という二つの異質の論理が入り混じる難解なものとなってしまった。

この報告の課題は、  
交換において前提される欲求の性格を明らかにする。  
交換過程論を純粋な交換論として再構成する。その上で  
交換と表現の相違と関係について考えてみる。

欲求は無限か有限か——稀少性と余剰性

交換を引き起こす動力は何か、この問いに対し、人間の欲求であると経済学は答えてきた。交換は欲求の充足を目的として惹起される。このことをアダム・スミスは次のように言い表わしている。

他人にある種の取引を申し出るものはだれでも右のように提案するのである。私の欲しいwantものをください、そうすればあなたの望むwantこれをあげましょう、というのが、すべてのこういう申し出の意味なのであり、こういうふうにしてわれわれは、自分たちの必要としている他人の行為の大部分をたがいに受け取りあうのである。(A. スミス『国富論』、大河内監訳、中公文庫、26頁)

私の「望むwant」ものと他人の「望むwant」ものとが交換される。このようなイメージが経済学にとっての交換の原像をなしていると言ってよい。その他の多くの部分では対立する諸見解も、欲求を交換の起点に据えるという点では一致している。

しかしながら、欲求という出発点を共有するとはいえ、欲求そのものの見方は決して同じではない。欲求の捉え方には、二つの対照的な立場が存在する。第一は、欲求がほとんど無限の広がり大きさをもつと想定するものである。この場合、欲求を充足するための手段は、欲求に対しつねに稀少である。それゆえ、私が所有するものを手放すとしても、それが自分にとって不要だからではない。他人の所有するものの方が相対的に

みてより欲求を充足するかぎりにおいて、自分の所有するものを交換に投じるのである。

これに対し、第二の捉え方によれば、人間の欲求は限られており、その充足に必要な大きさを超えれば、余剰が生じることになる。もっとも、余剰が手元にあるだけでは、交換は起動されない。そのためには、余剰の存在に加えて、他人の所有するものに対して欲求を抱いている必要がある。このような条件が揃ったとき、自分にとって不要なもの＝余剰を手放して必要なものを獲得するという関係が成立する。

#### 欲求needと欲望desire——奢侈論争を巡って

人間の欲求に二つの異質なものが存在していることは、昔からよく指摘されてきた。アーサー・ラヴジョイはそれを「あらゆる人間とともに他の動物にも共通している欲求」と「特殊人間的な欲望、つまり承認願望という意味での『高慢さpride』」とに分別している。言葉の上でも、両者は、欲求Bedürfnis/need/besoinと欲望Begierde/desire/désirという別々の語で言い表わされるのが普通である。この欲求と欲望という二つの情念が徐々に市場化されていくなかで引き起こされたのが、いわゆる奢侈論争である。

必需品necessaryと奢侈品luxuryは、欲求と欲望の対象がそれぞれ商品化されたものと言える。論争は、奢侈が社会にとって害か益かという当為を巡って展開されたのであるが、今回の報告に関わって特に注目されるのは、奢侈擁護派の多くが必需品と奢侈品の連続性という観点から奢侈の相対性を指摘していることである。奢侈の拡大を擁護するに当たって、必需と奢侈の区別の、したがって、欲求と欲望の伝統的な区別の無効性が主張されたのである。

奢侈擁護派（マンデヴィル、ムロン、ヴォルテール、ヒューム）と奢侈批判派（ルソー）との対立と同じ構図を、上で見た経済学における欲求の捉え方の違いのなかにも見て取ることができる。その際、ポイントとなるのは、欲求needと欲望desireの性格の相違である。

欲求needは、何らかの欠如をその原因とする。したがって、その欠如が埋められれば充足され、欲求は止むことになる。他方、欲望desireは、そもそも欠如を出発点としないため、欲望の対象が得られたとしても欲望が消え去ることはない。こうして見ると、欲求を有限なものとして捉え、余剰を認める立場は、欲望desireよりもむしろ欲求needに焦点を合わせていることが分かる。他方、無限の欲求に対する充足手段はつねに希少であるとする見方は、欲望desireを射程に入れている。もっとも、それは、欲望desireを想定しているというよりも、むしろ、奢侈擁護派と同様に、欲求と欲望の区別を認めず、両者を連続したものと捉えていると言えよう。

#### 資本主義社会における富

この点について、マルクスはどう捉えていただろうか。マルクスの体系においても、欲求は重要な位置を占めているが、アグネス・ヘラーが指摘するように、欲求自体の定義をマルクスは与えていない。しかしながら、いくつかの叙述からマルクスの欲求の捉え方を推測することは不可能ではない。例えば、第2章「交換過程」では次のように述べられている。

ある使用対象が可能性から見て交換価値であるという最初のあり方は、非使用価値としての、その所持者の直接的欲望を越える量の使用価値としての定

在である。(K., I, S.102)

とりわけ交換過程論で頻出する「非使用価値」、「他人のための使用価値」といった表現は、明らかに欲求の有限性を前提にしている。上の区別に基づけば、マルクスの欲求論は、欲望desireではなく欲求needをベースにしていると一先ず言ってよいだろう。さらにマルクスは次のようにも述べている。

彼の商品は、彼にとっては直接的使用価値をもっていない。もしそれをもっているなら、彼はその商品を市場にもってゆかないであろう。彼の商品は、他人にとって使用価値をもっている。彼にとっては、それは、直接にはただ、交換価値の担い手でありしたがって交換手段であるという使用価値をもっているだけである。それだからこそ、彼はその商品を、自分を満足させる使用価値をもつ商品とひきかえに、手放そうとするのである。(K., I, S. 100)

ここでは、自分にとって不要なもの＝余剰物を他人のもつ欲求needの対象＝必要物と交換するという関係性が描かれている。この関係性のなかでは、欲求needが重要な役割を果たしている。すなわち、交換の積極的要因は欲求needの方にあり、余剰はその消極的条件をなすにすぎない。欲求に応じる限りにおいて、余剰は交換へと投げられる。逆に言えば、欲求に対応しない余剰は、交換部面に登場することができない。ここでは、交換の範囲は欲求＝必要needという狭い限界のなかに閉じ込められている。

しかしながら、このような狭隘な交換像は、『資本論』冒頭の資本主義社会における富のイメージ、すなわち、「巨大なungeheur (怪物Ungeheureのような) 商品集合」(K., I, S.49) という表現とは大きく懸け離れている。また、『経済学批判』において、「富の最初の原生的な形態は過剰または余剰という形態であり、生産物のうち使用価値としては直接に必要なとされない部分であり、あるいはまたその使用価値がたんなる必需品の範囲をこえるような生産物の所有である」(Kr., S.105) と述べていることとも整合的ではない。

#### 小幡「欲求の分節化」説の検討

こうした不整合を解決する試みのひとつとして、小幡道昭の価値形態論を検討してみよう。小幡は、有限の欲求から出発しながらも、交換を求める諸形態の展開を通じて、交換の背後にある富の世界が包摂されるに至ると述べる。

小幡は、価値形態論の形態Ⅰから形態Ⅱの展開を欲求の拡大に求める見解や形態Ⅰを形態Ⅱの要素と見る立場に対し、「単純な価値形態に外部から欲求の多面性を接ぎ木する」(小幡道昭『価値論の展開』、東京大学出版会、48頁) ものであるとして批判する。「欲求の指向性と定量性」を前提にした上で、「リンネル所有者は上衣所有者の観点をかりて視野を拡大し、そこからさらに茶の所有者の観点到委譲するというかたちで、自己の周辺の商品集聚を探索し、いわばリンネル所有者の利害に密着した欲求の網の目を手繰りだす」(『展開』49頁) という「欲求の分節化」説を提示している。

ここでの議論の前提には、形態Ⅰには、いわゆる<欲求の二重の一致double coincidence of wants>の困難があり、それを回避するものとして貨幣が生成するという理解がある。問題は、「欲求の分節化」を延長することによって、<欲求の二重の一致>

の困難が解決されるか、という点である。

まず、形態Ⅰ→Ⅱについて見てみよう。「欲求の指向性」＝一意性という小幡の前提に従えば、上衣所有者がたまたまリンネルを欲求する可能性はきわめて低い。では、第三の商品、茶に視野を広げた場合はどうか。これは、上衣所有者の欲求の指向性をリンネル所有者が知っているかによって異なる。それを知らない場合には、上衣所有者が茶を欲求する可能性のうえに、茶所有者がリンネルを欲求する可能性が重なることになり、欲求の一致は余計に困難になる。知っていた場合には、第一の可能性は確実となるが、第二の茶所有者がリンネルを欲求する可能性の問題が残るため、一致の困難は形態Ⅰと変わらないだろう。これは、第四、第五...の商品と延長していったとしても同じである。むしろ、一致の確度を高める要因となりうるのは、「上衣の所有者が複数存在し、その各々が異なった欲求を抱いている」（『展開』49頁）ことであろうが、これは「欲求の分節化」とはさしあたり関係はない。

それでは、形態Ⅲにおいて、この困難は解消されるだろうか。ポイントとされているのは、「〔特定の〕商品が直接的欲求の対象として多様な種類の商品所有者から頻繁に求められている」（『展開』54-55頁）という状況である。形態Ⅱとの違いは、上衣所有者に限らず、茶等々の多くの商品所有者が特定の商品直接的欲求の対象としていることが予め分かっている点である。この特定の商品を獲得することができれば、「自己の特殊な直接的欲求の対象に辿りつく経路を短縮する効果」が得られるだろう。しかし、ここでも、欲求の一致の問題は、この特定の商品の所有者がリンネルを直接的欲求の対象とするか、というかたちで残らざるをえない。

#### 交換過程論の再構成

ここで発想を逆転させてみる。＜欲求の二重の一致＞の困難は、自分の欲する商品の所有者が同時に自分の商品を欲求するか、という点にあった。この困難を欲求するという能動的な立場からではなく、欲求されるという受動的な立場から捉えなおしてみたらどうだろうか。価値形態論に即して言えば、相対的価値形態の視点からではなく、等価形態の視点からはじめてみたらどうか。

Aの所有するaがbの所有者Bによって欲求されているとする。このとき、Aもbを欲求していれば、＜欲求の二重の一致＞が見られるが、そのような偶然はめったに起こりえない。さらに、cの所有者Cはbを欲求しているが、Bはcを欲していない。Aがcを望んでいれば、いずれかの商品を媒介として交換を行なうことができるが、この一致も同様に困難である。欲求の向きを矢印で表わせば、以上の関係は

A-a ← B-b ← C-c

となる。

このことは、宇野の価値尺度論の理解とも密接に関わっている。

A.O.ラヴジョイ『人間本性考』（鈴木ほか訳、名古屋大学出版会）163頁。

マンデヴィルの『蜂の寓話』の出版をきっかけとして、18世紀のフランスおよびスコットランドにおいて、奢侈を巡る論争がたたかわされた。この奢侈論争については、森村敏己「商業社会論としての奢侈論」『名譽と快樂——エルヴェシウスの功利主義』（法政大学出版局）所収、を参照。

この見解はマンデヴィルのなかにすでに見られる。「人間を生き物として存続させるのに直接必要でないものはすべて奢侈であるとすれば（厳密にはそうであるべきだ）、世の中には、裸の未開人にあつてさえ、奢侈のほかにはなにも見出すことができない」（『蜂の寓話』、泉谷訳、法政大学出版局、101頁）

全く別の観点からであるが、同様の主張はポランニー派のハリー・ピアソンによってなされ、その後

*American Anthropologist*誌上で、経済余剰論争が展開された。H. W. Pearson, The economy has no surplus, in K. Polanyi et al. (eds.), *Trade and Market in the Early Empires*, The Free Press, 1957.

「すでにここ〔使用価値の定義〕で、マルクスは欲求の概念を使って定義をおこなっているものの、欲求の概念の定義はしていないことがはっきりしたのではないだろうか。欲求とはそもそも何のことか、彼は一度も書き記していない」（A. ヘラー『マルクスの欲求理論』、良知ほか訳、法政大学出版局、6頁）

受苦Leiden概念

欲求の多面性（ひとつひとつの対象に対する欲求は有限かもしれないが、そうした対象自体が多様である）や未来の欲求の潜在性を考慮すれば、欲求の有限性を弾力化することは可能である。しかしながら、欲求の空間的・時間的広がりを認めるにしても、所詮は程度問題であって、欲求の有限性から出発する限り、無限の欲望には到達しえない。

PAGE

PAGE 1